

“You Do Awake Your Faith”

——『冬物語』とジェイムズ一世のキリスト教育政策

野 崎 将 俊

I

『冬物語』(*The Winter's Tale*) 構想段階において、シェイクスピア (William Shakespeare) はグリーン (Robert Greene) のロマンス『パンドスト：時の勝利』(*Pandosto: The Triumph of Time*) を入念に読み込んだうえで、舞台となる二つの王国——シチリアとボヘミア——の入れ換えを決断したようだ。¹ グリーンのボヘミア王パンドストはシチリア王リオンティーズ (Leontes) に、シチリア王イギストゥス (Egistus) はボヘミア王ポリクシニーズ (Polixenes) に置き換えられ、結果としてシェイクスピアの上演ではシチリアが悲劇の舞台に、ボヘミアがパストラル的祝祭と再生の舞台となった。² この入れ換えとボヘミアで展開されるパストラルの場面の意味に関しては、これまでさまざまに議論されてきた。たとえばホニグマン (E. A. J. Honigmann) はシチリアを起源とするプロサーピナ神話への注目を促し、シェイクスピアがボヘミアとシチリアを入れ換えたのはプロサーピナへ祈りを捧げるパーディタ (Perdita) をシチリアの王女とするためだったと論じる (Honigmann 27-38)。マーツ (Louis L. Martz) は劇の構造を二部構成ではなく三部構成であるとしたうえで、その発展段階をそれぞれ古典的ギリシャ悲劇の世界、時間を超越

した異教的世界、同時代のキリスト教的世界と位置づけている (Martz 131-45)。スタディング (Richard Studing) 他の批評家は、ボヘミアのパストラルは本質的に反パストラルだと結論する。³

しかしながら、これらの議論はボヘミアとパストラルの結合の意味そのものを十分に解明しきれていないように思われる。ここで想起されるべきは、16世紀後半のイギリスでパストラルという様式を最大限まで拡大したスペンサー (Edmund Spenser) とシドニー (Sir Philip Sidney) が、ともにプロテスタントだったという事実であろう。エリソン (James Ellison) はこう述べている。

Pastoral was frequently (if by no means exclusively) associated with Protestantism during the English Renaissance. Protestantism was claimed to be a primitive, authentic version of Christianity, from which the Catholic Church had deviated; pastoral could thus be an attractive mode in which to represent Protestant virtues, and this was the line which had been taken by the greatest of Elizabethan Protestant poets, Edmund Spenser, and imitated by a host of his poetic followers.⁴

パストラルが初期近代イギリスのプロテスタント陣営によって頻繁に動員された宗教的言説の一部として理解されるならば、それをボヘミアに移植するという発想は十分に筋の通ったものだと考えられよう。なぜならボヘミアがフス (Jan Hus) の生地であり、揺籃期の宗教改革を支えた場所であるという一般通念は、フォックス (John Foxe) の『殉教者列伝』 (*Book of Martyrs*) などを通じてイギリスの人々に広く浸透していたからだ。⁵ パストラルはカトリック王国スペインの属領としてのシチリアよりもプロテスタント的信仰にある程度寛容であったボヘミアにこそふさわしい。とすれば、グリーンの舞台設定を故意に入れ換えることによって、シェイクスピアは当時のヨーロッパで燦り続けていたカトリックとプロテスタントの軋轢の火種を『冬物語』において演劇化しているのではないだろうか。そして物語の結末におけるシチリアとボヘミアの和解は、ヨーロッパ全土の宗教的統一というユートピア思想を夢くも描いているのではないだろうか。

『冬物語』は1610年の冬から翌年の春にかけてのどこかで執筆されたと考えられている。⁶ その頃ボヘミアはどのような状況に置かれていたのか。対す

るシチリアはどう見なされていたのか。イギリスの両国との外交関係はいかなるものだったのか。⁷ そしてシェイクスピアはどのようにそれらの事象を劇の中で扱っているのか。これらの問題に答えるためには、イギリス国王ジェームズ一世 (James I) の宗教的宥和政策に触れる必要があるだろう。⁸ ジェームズ朝のシェイクスピアは、ほぼ毎年のように1～2本の新作をまずグローブ座で上演し、その後クリスマスのシーズンにそれらをホワイトホールかハンプトン・コートで上演していた (Kernan xvii)。すなわち国王一座専属の劇作家が、国王が近く必ず劇を観覧するという事実と、劇を同時代の政治・宗教問題に対する劇作家の論評として判断するだろうという可能性を、意識しないまま活動していたということはいえぬのである。⁹ また『冬物語』が王女エリザベス (Elizabeth Stuart) とライン宮中伯フリードリヒ (Frederick V, Elector Palatine) との結婚を祝うべく上演されたという事実も忘れてはならない。シェイクスピアは国王と王室の視線を意識して『冬物語』を書いたはずである。さらに彼は当時のボヘミアとシチリアの状況を熟知し、ジェームズの著作を実際に読んでいたかもしれない——もしそれが正しいとすれば、彼はジェームズの目の前でプロテスタント国家とカトリック国家、そしてさらには「教皇」を舞台に載せることが何を意味するかを十分に理解していたことになる。本論は『冬物語』においてジェームズ一世の宗教政策がどのように反映されているかを考察するものである。

II

1609年、ジェームズ一世は『三重の瘤、三重の楔。即ち君主に対する忠誠の誓いへの弁明』(Triplici Nodo, Triplex Cuneus. Or an Apologie for the Oath of Allegiance) と題された本を出版する。¹⁰ これは実際のところ、作者不詳で前年ロンドンに出回ったパンフレットの改訂版であり、ジェームズの名を冠して再出版された『弁明』には新たに序文として『すべての偉大なる帝王、国王、自由国君主、キリスト教国家に対する予告』(A Premonition to All Most Mightie Monarches, Kings, Free Princes, and States of Christendome) がつけ加えられている。そしてこの序文は、オーストリア・ハプスブルク家出身の神聖ローマ皇帝にしてボヘミア王国君主、ルドルフ二世 (Rudolf II) に向けて書かれている。¹¹

『弁明』においてジェームズは1606年にみずから法制化した「君主に対す

る忠誠の誓い」を弁護している。「君主に対する忠誠の誓い」とは、前年の火薬陰謀事件発覚を受けたジェームズが、カトリック教徒に対して懐柔的だったそれまでの方針を転換し、イギリス国教会への忠誠を徹底すべく聖職者叙任の際に宣誓を義務づけた七箇条から成る誓いである：1. ジェームズは正統な王である；2. 教皇はいかなる君主をも退位させる権利を持たない；3. 王に忠誠を尽くし、陰謀から護る；4. 陰謀があれば密告する；5. 教皇から破門された王を退位させたり殺したりしてもかまわないというカトリックの教義を拒否する；6. 教皇たりといえどもこの誓いを破らせることはできない；7. この誓いは合法である（Patterson 79-80）。

ジェームズの意図に反して「君主に対する忠誠の誓い」は王権と教皇権の優劣という長年の論争を蒸し返す結果となった。ジェームズはイングランド王として即位する以前から、みずからの舵取りでカトリックとプロテスタントの軋轢に終止符を打ち、ヨーロッパ全土に宗教的統一をもたらそうという展望を持っており、1604年の議会での演説においてもその旨を明らかにしている（Patterson 76, Sommerville 132-46）。しかしジェームズは火薬陰謀事件でまず出鼻をくじかれ、続く「君主に対する忠誠の誓い」論争によって、彼の構想の鍵を握るローマ教皇との溝を埋めるどころか、むしろ広げてしまったのである。

教皇パウロ五世（Paul V）の反応はすばやく、書簡を通じてイギリス国内のカトリック教徒に「君主に対する忠誠の誓い」を拒否するよう促した（Patterson 81-82）。ジェームズは世俗君主を廃位させる教皇の権利に異議を唱えながらも、破門の権利までは否定しておらず、彼に教皇の感情を逆なでする意図はもともとなかったようだ。にもかかわらず過剰な反応をみせる教皇に対して動揺と憤慨を抑えきれないジェームズは、まず『弁明』において「君主に対する忠誠の誓い」は単にイギリス国民の王権への服従を促すものにすぎないと釈明し、追加された『予告』でルドルフ二世を筆頭とするヨーロッパ諸国の君主に教皇庁への警戒を呼びかけたのである。『弁明』からは彼が教皇との距離を取りあぐねているさまが伺える。

当時まさに最高潮を迎えていた「君主に対する忠誠の誓い」論争が『冬物語』の執筆・上演に与えた影響は、作品解釈上、けっして過小評価されてはならない。たとえばポリクシニーズの人物造形について考えてみよう。ポリクシニーズに割り当てられた台詞から聞こえてくるのは、彼の宗教的立場の両義性である。パストラルの語彙を用いて最初にプロテスタントの価値観を

劇中に呼び込むのが彼なら (“Nine Changes of the watery star hath been / The shepherd’s note” I. ii. 1-2)、逆にカトリック的な観念を披露するのも彼自身にほかならない。¹²

We were as twinn’d lambs that did frisk i’ th’ sun,
 And bleat the one at th’ other: what we chang’d
 Was innocence for innocence: we knew not
 The doctrine of ill-doing, nor dream’d
 That any did. Had we pursu’d that life,
 And our weak spirits ne’er been higher rear’d
 With stronger blood, we should have answer’d heaven
 Boldly ‘not guilty’, the imposition clear’d
 Hereditary ours. (67-74)

彼の語りが人間の罪への傾きを「肉欲」(concupiscence)と定義するカトリック要理に基づいていることは、まず“stronger blood”という語彙の選択によって示唆されている。また、ここで想定されている子供の無垢な状態は、末尾のラテン語的な一節——おそらくは「肉体を通じて継承される原罪の免除」を意味する——に凝縮されている。カルヴィニズムがいかなる罪の赦しも認めない一方で、カトリックでは洗礼によって原罪が免除されることを思い起こしてみれば（それはつまり洗礼では原罪しか免除されないということだが）、ポリクシニーズが基本的にはカトリック的な信仰を持っていることが読み取れるだろう (Ellison 182)。

ポリクシニーズが両義的な信仰の立場を保持しているのと同じように、論争の当事者のひとりであるルドルフ二世もまた、基本的にはカトリックでありながら、プロテスタント的信仰に対してもある程度は寛容であり続けた。エヴァンズ (R. W. J. Evans) によれば、ルドルフはその父マクシミリアン二世 (Maximilian II) にもましてカトリック的な人物であり、派閥抗争と分裂を繰り返すプロテスタント陣営には嫌悪さえ覚えていた (エヴァンズ上 174)。しかしその一方で抑圧的な教皇庁に対しても強い反感を抱いており、その証拠に彼は心の底では軽蔑しているはずのプロテスタント諸侯の懐柔をけっして怠らなかった。信仰を政治に寄り添わせることにルドルフは何の躊躇もなかったのである。

エリソンも指摘しているように、表向きはカトリックを信奉する少数のエリート層が多数派のプロテスタントを支配するというルドルフ時代のボヘミア王国の支配構造が、パストラルが内包する宮廷と民間という縦の対立軸に巧みに重ねられつつ、『冬物語』では再現されている。第四幕第四場の羊の毛刈り祭に変装という両義的な手段を用いて介入するポリクシニーズは、『ヘンリー四世』(Henry IV) 二部作におけるハル王子(Prince Hal)と同じく、民間の語彙を用いて権力網の操作と強化とを試みる支配者である(Greenblatt 1988 21-65, Kernan 150-68)。ここで彼がパーディタと交わすart対natureの論争にもルドルフを暗示する何かが書き込まれている。パーディタが人の手で作り変えられて生まれた花である「縞石竹」(“streak’d gillyvors” IV. iv. 82)を、“nature’s bastards”(83)として退けるのに対して、自然に利益をもたらす人為に限っては善と判断するポリクシニーズの結論は、自然の神秘の解明とその力の統御を目指すパラケルスス哲学に通じるものだ——“This is an art / Which does mend nature-change it rather-but / The art itself is nature”(94-6)。ルドルフ二世がオカルト諸学に多大な関心を寄せていたのは有名だが、オカルト諸学にもまたヨーロッパの宗教的再統合という思想的側面があった。立場は異なるものの、相争うキリスト教世界の調停者を自認するジェイムズはルドルフに自分と同じ資質を見出していたのにちがいない(エヴァンズ下 86)。最晩年のルドルフは弟マティアス(Matthias)の野心から逃れて居城に閉じこもり、錬金術、魔術、美術品の蒐集に没頭していたと伝えられている。その彼に向けてジェイムズは『予告』を書いたわけだが、『冬物語』がホワイトホールで上演されたときジェイムズがポリクシニーズの上にルドルフ二世のイメージを重ね合わせたとしても、さほど不思議ではないだろう。

ところでルドルフを連想させる人物がもう一人、『冬物語』には登場する。浮浪者オートリカス(Autolycus)は17世紀前後のイギリスでプロテスタント陣営から盛んに攻撃されていたカトリックの聖物売りがモデルとなっていると考えられている(Kaula 288)。しかしその彼自身が、「聖別」されたがらくたの類に群がる人々、つまり自分の顧客を揶揄しているのは皮肉なことだ(“they throng who should buy first, as if my trinkets had been hallowed and brought a benediction to the buyer” IV. iv. 601-3)。そんな彼が羊飼いとその息子をボヘミアに向けて出帆する間際のフロリゼル(Florizel)とパーディタのもとへ導き、幸福な結末を遠くから支援する。オートリカスという名が「一匹狼」(lone wolf)を意味するように、彼は劇中のいかなる集団・階級からも遊離し

たまま外部からボヘミアとシチリアの融和を媒介するのである (Orgel 50-53, Knapp 181-82)。一方、神話上のオートリカスは商人・職人・雄弁家の守護神 Mercury の息子であり (“being as I am, littered under Mercury” IV. iii. 25)、さらにローマ神話のメルクリウスに対応するギリシャ神話のヘルメス (Hermes) は新プラトン主義者によってオカルトの神「三重に偉大なるヘルメス」(Hermes Trismegistus) と同一視された存在である。もちろんオートリカス自身にオカルトの影を見出すのは難しいが、彼の宗教的立場と間接的な調停者という役割には、ルドルフを思わせる部分が少なからずあると言えるだろう。両者を繋ぐ接点はもうひとつある。ルドルフというゲルマン系の名前もまた「狼」(famous wolf) を意味するのだ。

このように『冬物語』にはジェームズ一世の視線を意識した「君主に対する忠誠の誓い」問題の当事者への言及が埋め込まれていると考えられる。時事問題をいったん解体して作品中に散布するというシェイクスピアの手法は、なにも『冬物語』だけに用いられたものではない。¹³ シェイクスピアは常に社会一般を批評的に眺め、そこから得た材料を文学的伝統と絡ませて芸術性の高い演劇を構築する。しかも彼は現実との接点をぼかすために非現実的な要素をあえて強調することを忘れない。『冬物語』においてはジョンソン (Ben Jonson) の指摘で有名になった「ボヘミアの海岸」がそれである。¹⁴ 「ボヘミアの海岸」はグリーンズの『バンドスト』にも登場するが、シェイクスピアはそれを修正するどころかむしろ際立たせているように見える。「ボヘミアの海岸」は「スイスの海軍」のような他愛もない冗談かもしれない (Orgel 38)。しかしシェイクスピアの場合、その冗談は作品の虚構性を高め、観客・読者の目を現実からそらすための偽装ともなり得るのだ。そこでシチリアに目を転じてみると、実は南国シチリアの冬は「悲しい話は冬にこそふさわしい」 (“A sad tale's best for winter” II. i. 25) と言えるほど大して寒くもない。このことが過去に一度も指摘されていないのは、ただ「シチリアの冬」があまり効果的な偽装として機能していないということなのかもしれない。しかし『冬物語』のシチリアもボヘミアと同じく同時代の時局的な空間として了解されていたという事実は、けっして見過ごされてはならないだろう。

III

「あの忌まわしい国シチリア」(“that fatal country Sicilia” IV. ii. 20-21) はジェイムズ朝のイギリスにとって現に忌まわしい存在であった。シチリアやナポリはスペイン・ハプスブルク家の支配が及ぶカトリック帝国の属領であるとともに、地中海貿易の要衝でもあり、そこにイギリス人が立ち入ることが可能になったのは1604年にジェイムズがスペインと和解してからのことである。ジェイムズとスペイン王フェリペ三世 (Philip III) は互いに友好的な外交関係を維持することで合意していたが、反スペインの方針を貫くイギリス議会からは国王に対する根強い反発があった。現に当時、南イタリアに滞在していた商人から議会に対して反スペイン的政策の強化を煽るような材料がいくつも報告されていた。そんなさなか早くも同年、イギリスとシチリアの間で外交問題が持ち上がる。イギリスの商船トライアル号 (*The Trial*) がシチリア総督フェリア (Feria) 公のガレー船団に拿捕され、積荷は接收、乗組員は投獄されるのである。フェリア公は積荷と船の返還を拒否し続け交渉は暗礁に乗り上げる。さらに1607年には、海賊行為の告白を迫られ拷問を受けた乗組員のうち3人が死亡したと報告されている。この事件に関する最後の言及は1611年4月だが、その時点においても未だ完全な決着を見ていない (Koenigsberger 308-10)。当時『冬物語』を観た者は誰しもこの事件を想起し、シチリア王リオンティーズに暴君、カトリック、そして異端審問というイメージを重ね合わせただろう。ここでもシェイクスピアの行った配置転換は効果的に機能しているのだ。

ところでシチリアの暴君リオンティーズの部下であるカミッロ (Camillo) は、まるで告解に耳を傾けるカトリックの司祭のようにリオンティーズの持ちかけるあらゆる相談に応じていた。

I have trusted thee, Camillo,
 With all the nearest things to my heart, as well
 My chamber-counsels, wherein, priest-like, thou
 Hast cleans'd my bosom: I from thee departed
 Thy penitent reform'd. (I. ii. 235-39)

カミッロは『パンドスト』に登場するボヘミア王の酌取りフラニオン (Franion) とシチリア王子ドラストゥス (Dorastus) の召使いカプニオ (Capnio) の役割をあわせ持つが、彼の人物造形はシェイクスピアの創意に基づくところが多い。『パンドスト』の若き男女ドラストゥスとフォーニア (Fawnia) が偶然の成り行きでボヘミアに流れ着く一方で、『冬物語』のパーディタとフロリゼルは、もしカミッロの助力がなければシチリアへたどり着くことができなかった。そんな重要な役回りの登場人物になぜ教皇パウロ五世の旧名が与えられているのか。カミッロとはいったい何者なのか。¹⁵ この問題にはやはり「君主に対する忠誠の誓い」論争が大きく関わっている。

論争の発端は火薬陰謀事件にある。事件の首謀者の思想的裏付けとなっていたのは、教皇は反カトリック的な君主を破門・廃位する権利を有し、廃位された君主の暗殺は黙認されるという教皇庁の統一見解であった。¹⁶ たとえば国王の圧政によって国民が虐げられている場合、国民は教皇に国王の廃位を嘆願することができる。教皇が権利を行使し、国王が廃位されれば、その生殺与奪は民意に委ねられる (これはユグノーによる王権の解釈とどこかで通じ合っている)。つまり王権は絶対的な権利ではなく、あくまでも一定の契約関係を前提として成立する相対的なものなのだ。これに対してジェイムズはまず使徒継承を論拠とする王権神授説の正当性を主張する。そして教皇が世俗的な政治の世界に介入し、恣意的に国王の廃位を繰り返してきたことこそが宗教的混乱の原因であり、それは歴史が証明するところだと反駁する (Patterson 92-94)。

しかしここで確認しておくべきことは、「君主に対する忠誠の誓い」はエリザベス一世 (Elizabeth I) 時代の「国王至上法」(Act of Supremacy) とは異なり、教皇の霊的権威や破門の権利までは否定しておらず、あくまでも教皇の国王を廃位する権利と、廃位された国王の暗殺に対する是認に反発しているということである (Patterson 84-86)。確かにジェイムズは『予告』で教皇を反キリスト者であるとさえ述べているが、『弁明』全体の意図はローマ教皇庁を支配する人々への説得である。ジェイムズにとって教皇はけっして打倒すべき相手ではなく、みずからの宥和政策推進の鍵を握る人物なのだ (Patterson 97)。ジェイムズの論理からすれば、霊的権威の象徴である教皇が世俗君主廃位の権利を放棄し、カトリック教会の利害に従って君主間の対立を煽るのをやめ、むしろ君主間の融和に資するように振舞いさえすれば、ヨーロッパの宗教的再統合というユートピア思想の実現はけっして不可能な試

みではなくなるのである。そのジェイムズの論敵である教皇パウロ五世の旧名は、カミッロ・ボルゲーゼ (Camillo Borghese) といった。

『冬物語』に登場するシチリア王リオンティーズの廷臣カミッロが同時代の教皇の旧名と同じであるという実に単純な事実是不思議なことにこれまで完全に見過ごされてきた。¹⁷ しかし「君主に対する忠誠の誓い」論争を背景として、教皇がカミッロの人物造形において何らかの示唆を与えたとするならば、作品解釈に新たな可能性を見出すことができるだろう。そこでカミッロが教皇の俗名を与えられ、なおかつ善人として描かれているのは、前述のようなジェイムズの考える霊的權威の理想像が彼に投影されているからだと仮定してみよう。王に従属し、王を信仰の見地から導き、君主同士の宥和を促す役割がカミッロには担わされている。カミッロはおそらくリオンティーズとポリクシニーズを幼少の頃から見守ってきたとも考えられる。彼は二人を熟知しており、二人が本来は親密な関係を継続すべきものであることを劇の冒頭で明言している。

Sicila cannot show himself over-kind to Bohemia. They were trained together in their childhoods, and there rooted betwixt them then such an affection which cannot choose but branch now. (I. i. 21-24)

この関係性は、シチリア王とボヘミア王という両ハプスブルク家出身の二人の君主が、教皇から見れば二人の比喩的な息子に等しいことを想起させる。さらにカミッロは嫉妬の発作に駆られたリオンティーズにポリクシニーズ暗殺を命じられるが、その命令には従わないことを決意する。

If I could find example
Of thousands that had struck anointed kings
And flourish'd after, I'd not do 't: (I. ii. 357-59)

『冬物語』が初めてグローブ座で上演されるちょうど一年前、実際に君主を暗殺したカトリック教徒がいた。1610年5月14日にアンリ四世 (Henry IV) を刺殺した自称イエズス会士ラヴァイアック (Francois Ravallac) である。しかしカミッロはラヴァイアックとは逆に暗殺を思いとどまる。彼はポリクシニーズにすべてを打ち明け、ともにシチリアを脱出し、その後ボヘミア王

とシチリア王の和解を媒介するという重要な役割を果たすのだ。教皇を暗示する名を与えられたカミッロが世俗君主暗殺は否であると結論するとき、それは教皇庁に対するとりわけ痛烈な皮肉となるだろう。

カミッロと同じく廷臣として王の不正を諫め、王を導き、しかも反カトリック的な資質を与えられた人物はもう一人いる。ポーライナ (Paulina) である。暴君と化したリオンティーズは異端審問を思わせるような言葉でポーライナを脅迫する——“I’ll ha’ thee burnt” (II. iii. 113)。それに対して彼女は「火刑を口にする者こそ異端である」と反論する。

I care not:

It is the heretic that makes the fire,
Not she which burns in ’t. I’ll not call you tyrant;
But this most cruel usage of your queen—
Not able to produce more accusation
Than your own weak-hing’d fancy—something savours
Of tyranny, (113-19)

ポーライナはシェイクスピアが新たに創造した登場人物であり、『パンドスト』には彼女に相当する役回りの者は見当たらない。反カトリック的なポーライナには、何よりもまずプロテスタント陣営によって崇拝されていた聖パウロ (St Paul) が重ねられていると言えるだろう (Ellison 190, Orgel 53-62)。しかし教皇パウロ五世のイメージも彼女には投影されているように見える。なぜならポーライナという名が教皇を彷彿させるだけでなく、彼女を威嚇するリオンティーズの台詞にはさりげなく、しかし明らかに「君主に対する忠誠の誓い」問題への言及が差し挟まれているからだ——“On your allegiance, / Out of the chamber with her!” (II. iii. 20-21)。彼女はリオンティーズの暴走を徹底して非難し、“tyranny”に屈することよりも“allegiance”を破って最後まで抵抗することを選びとる。真の忠誠とは暴君になりはてた王に追従することではなく、王の誤謬を正すことだからだ。

ポーライナは死んだはずのハーマイオニ (Hermione) の復活を準備し、リオンティーズを魂の救済へと導き、彼に信仰の覚醒を促す。

Leon. What you can make her do,

I am content to look on: what to speak,
 I am content to hear; for 'tis as easy
 To make her speak as move.

Paul. It is required
 You do awake your faith. (V. iii. 91-95)

ジェイムズ一世もまた『予告』の中でこう書いている。

I can but humbly pray with *Elizeus*, that it would please GOD to open your eyes, that yee might see what innumerable and inuincible armies of Angels are euer prepared and ready to defend the trewth of GOD: and with *S. Paul* I wish, that ye were as I am in this case; especially that yee would search the Scriptures, and ground your Faith vpon your owne certaine knowledge, and not vpon the report of others; since euery *Man must bee safe by his owne faith*. (159)

聖パウロへの言及、“it would please GOD to open your eyes”という一節、そして“*Man must bee safe by his owne faith*”というハバクク書(2.4.)からの引用は、ポーライナの台詞と響き合う要素を多分に含んでいる。ここにもう一人のパウロ——パウロ五世——を重ねたとき、そこには「君主に対する忠誠の誓い」問題を経由して、ジェイムズが夢見たカトリックとプロテスタントの和解、ヨーロッパ大陸における平和なキリスト教社会の実現という構想が浮かび上がるだろう。

ハーマイオニが復活した後、ポーライナはカミッロと結ばれる。¹⁸すでに高齢の二人に対してリオンティーズが結婚を勧めるのは、あまりに唐突で不自然な印象を免れない。しかし仮にカミッロとポーライナが霊的權威の本来あるべき姿を分かち持っているとするれば、彼らが物語の最後で一体となるのは必然である。哀れなアンティゴナス(Antigonus)に関してひと言つけ加えれば、彼はけっして盲目的でも野心的でもなかったが、暴君リオンティーズの命令に屈したという、ただその一点のために命を落としたのだ。

『冬物語』は当時の王室に好まれた演目である。つまりジェイムズは、「君主に対する忠誠の誓い」問題でパウロ五世と激しい論争を繰り返していたにもかかわらず、ポーライナとカミッロによって示唆される解釈の可能性には気づかなかったか、気づいてもそれには不満を覚えなかったか、あるいは気

づいたうえで無視したということになる。いずれにせよ『冬物語』で前景化されているのはハーマイオニの復活の物語であり、二人の周縁的な登場人物にどれほどの配慮がなされるかは分からない。しかし当時のヨーロッパ全土を揺るがしていた宗教紛争の経緯と、ジェームズが取り組んでいた世界教会的な宗教政策を参照しつつ、『冬物語』にもまた極めて政治的な側面があることは再確認されてしかるべきだろう。ポーライナとカミッロの二人の結びつきによって生まれる「義人としてのパウロ五世」あるいは「反カトリックの教皇」という撞着的な表象は、そのまま国王ジェームズ一世の抱える矛盾を示唆しているのだ。¹⁹

IV

『冬物語』は王女エリザベスとライン宮中伯フリードリヒとの結婚を祝うために、1612年のクリスマスから翌年の5月20日までのどこかで上演された。劇の中盤で登場する「時」(Time)は16年の歳月の流れを告げ、シチリアで生まれボヘミアで育てられたパーディタはその間に16歳になっているはずである。²⁰ 彼女の年齢は結婚を迎えたエリザベスのそれと一致する。「失われた者」という意味のパーディタは、父リオンティーズに「発見」されても(“the king's daughter is found” V. ii. 23) その名は変わることがない。彼女は永遠に「失われた者」のままなのだ。そんなパーディタの名はまさにエリザベスにこそふさわしいと言えるかもしれない。エリザベスは生涯にわたって宗教政策に翻弄され続けた人物であった。火薬陰謀事件の首謀者は当初、ジェームズ暗殺に成功したその暁には彼女をカトリックに改宗させようとして王位につけようと目論んでいた。また彼女と今回のプロテスタント諸侯との結婚はジェームズ一世の宗教的宥和政策の一環だと理解されている。エリザベスはやがてボヘミアに渡り、「冬の女王」(Winter Queen)として東の間の幸せを味わうまもなく、最後の長い宗教戦争へと巻き込まれていく。イエイツ(Frances Yates)の言うとおり、『冬物語』には予言めいた部分がある(イエイツ153)。

『冬物語』構想の時代と重なる「君主に対する忠誠の誓い」論争の要点は、教皇による世俗君主暗殺の是非に始まり、信仰と政治の問題の再点検を経て、ジェームズが当初から抱いていた世俗君主による全ヨーロッパのキリスト教国家再統一という夢の再燃に繋がったということである。ジェームズは教皇とのやり取りの中からその可能性を模索する一方で、王子・王女の政略的な

結婚を通じてまた、みずからの夢を実現しようとしていた。しかし二人の皇太子をそれぞれカトリック王女と結婚させようという計画—ヘンリー（Henry Frederick Stuart）とトスカーナ大公（Grand Duke Ferdinand of Tuscany）の娘、チャールズ（Charles Stuart）とスペイン皇女マリア（Maria, Infanta of Spain）—はどちらも失敗に終わる。ボヘミア王妃となったエリザベスは父王に支援を断たれた末に国を追われ、亡命生活を余儀なくされる。

一見すると支離滅裂なジェイムズの宗教政策の裏には、彼の出自であるスコットランドの政治的・宗教的風土がある（Patterson 1-30）。そもそもスコットランド王としてのジェイムズ自身、一方では殉死したカトリック君主を母親に持ちながら、他方では長老派教会とともにスコットランド宗教改革を推進するという複雑な政治的状况を経験したうえでイングランドの王位についた。テューダー王朝に始まる宗教的孤立によってイングランドが教会権力の埒外に置かれているという状況は、ジェイムズにとっては幸運にも、みずからをカトリックとプロテスタントの調停者として位置づけ、スコットランド的な長老派の理念と家父長的支配制度とを組み合わせるヨーロッパの宗教的宥和を促進する動機となった。このようなジェイムズの展望は、少なくともイングランド王即位以降の最初の数年間においては、ある程度の切実さを備えていたように思われる（Patterson 1-74）。

1611年11月5日にホワイトホールで『冬物語』が上演されてから結婚式の行われた1613年2月14日までの一年強の間に何が起こっていたか。まずは結婚式のほんの二ヶ月前に二人目の「ヘンリー」、すなわち皇太子ヘンリーが父王との確執を深めたまま不可解な死をとげている。ルドルフ二世もすでにこの世を去っている。この短い期間に上演された2回の『冬物語』という象徴表現がもたらす効果はけっして同じものではないだろう。シェイクスピアの演劇はつねに彼の生きた時代状況から生成し、しかも時代の変化によってさまざまにその意味を変える。シェイクスピアはジェイムズ一世に触発されて全ヨーロッパの宗教的統一を舞台の上で描いた。『冬物語』は、とりわけ「それ以後」の歴史を知る者の目には、儚いユートピア思想のように映るのである。

註

- ¹ グリーンのテキストはGreene 225-317を参照した。
- ² 「パストラル」はパトナム (George Puttenham) に従い、シチリアの詩人を通じて確立された文学ジャンルとして定義する。Loughrey 34およびMarrapordi 213-28参照。
- ³ Bloom 139-49所収の“Shakespeare’s Bohemia Revisited: A Caveat”参照。他にはPeter Lindenbaum, “Time, Sexual Love, and the Uses of Pastoral in *The Winter’s Tale*” (Hunt 200-19)。
- ⁴ Ellison 179. 本稿はEllisonの論文に多大なる示唆を受けている。
- ⁵ ボヘミアにおける宗教改革運動の記述はFoxe 221-26参照。
- ⁶ サイモン・フォーマン (Simon Forman) の観劇記録により、1611年5月15日のグローブ座での公演を初演と考える。Chambers, vol. 1, 489参照。
- ⁷ 宗教紛争に絡むイギリスの外交関係についてはHadfield 21-96参照。
- ⁸ Patterson 1-154, Peck 1-95, Hamilton 1-29, 128-62を参照。
- ⁹ ジェイムズ時代における反体制的演劇に関してはTricomiを、ジェイムズと視覚表象との関係についてはGoldbergを、権力構造についてはTnnehouse 147-86を参照。
- ¹⁰ *Apologie*の本文についてはMcIlwain 71-109およびSommerville 85-131を参照した。
- ¹¹ “To the Most Sacred and Invincible Prince, Rodolphe the II” (McIlwain 110)。
- ¹² 本文の引用はPafford編集のArden版による。
- ¹³ ロマンズ劇では、たとえばLeah S. Marcus, “*Cymbeline* and the Unease of Topicality” (Ryan 134-68)、Constance C. Relihan, “Liminal Geography: ‘*Pericles* and the Politics of Place’” (Alison Thorne ed., *Shakespeare’s Romances* (Hampshire: Palgrave Macmillan, 2003):71-89などを参照。
- ¹⁴ “Shakespeare in a play brought in a number of men saying they had suffered Shipwreck in Bohemia, wher ther is no Sea neer by some 100 Miles” (Chambers, vol 2, 207)
- ¹⁵ カミッロはジェイムズ一世の顧問ロバート・セシル (Robert Cecil) をモデルにしているという議論も興味深い (Kurland 366)。
- ¹⁶ ただし火薬陰謀事件はカトリック教徒を根絶する口実を作るためにイギリス政府が企んだという説もある (Patterson 75-77)。
- ¹⁷ Paffordは劇中の登場人物の名前と過去の文学作品との関連を丹念に指摘し

ている。彼によればカミッロはプルターク (Pultarch) に登場する高潔なるカミルス (Camillus) を指す (Pafford 163)。またMartzはシェイクスピアがグリーンンの登場人物を適用する際にギリシャ語系の名前に変更していることに注目している。

¹⁸ ハーマイオニに関して興味深いのは、彼女がロシア皇帝を父に持つということだ——“The Emperor of Russia was my father” (III. ii. 119)。本稿では十分に検討することはできないが、当時のロシア皇帝のステレオタイプは「暴君」であった (Palmer 324-31)。

¹⁹ シェイクスピアとカトリシズムについては近年盛んに論じられている。*The Winter's Tale*との関係ではGreenblatt (2001) 200-4を参照。

²⁰ Wilsonはジェームズ一世の母メアリ・ステュアート (Mary Stuart) の処刑とジェームズの戴冠の間が16年であることから、ハーマイオニはメアリを象徴し、彼女の復活は非業の死をとげた母への供養であると論じている (246-70)。

参考文献

- Bloom, Harold, ed., *William Shakespeare's Winter's Tale*. New York: Chelsea House Publishers, 1987.
- Chambers, E. K. *William Shakespeare*. 2 vols. Oxford: Clarendon P, 1930.
- Dutton, Richard, et al., eds. *Theatre and Religion: Lancastrian Shakespeare*. Manchester: Manchester UP, 2003.
- Ellison, James. “*The Winter's Tale* and the Religious Politics of Europe.” *Shakespeare's Romances*. Ed. Alison Thorne. Hampshire: Palgrave Macmillan, 2003. 171-204.
- Evans, R. J. W. *Rudolf II and his World: A Study in Intellectual History 1576-1612*. Oxford: Clarendon P, 1973.
- Goldberg, Jonathan. *James I and the Politics of Literature: Jonson, Shakespeare, Donne, and their Contemporaries*. Stanford: Stanford UP, 1989.
- Greenblatt, Stephen. *Hamlet in Purgatory*. Princeton: Princeton UP, 2001.
- . *Shakespearean Negotiations: The Circulation of Social Energy in Renaissance England*. Berkeley: U of California P, 1988.
- Greene, Robert. *The Life and Complete Works in Prose and Verse*. Ed. Alexander B.

- Grosart. Vol. 4. New York: Russell & Russell, 1964.
- Hadfield, Andrew and Paul Hammond, eds. *Shakespeare and Renaissance Europe*. London: Thomson Learning, 2005.
- Hamilton, Donna B. *Shakespeare and the Politics of Protestant England*. New York: Harvester Wheatsheaf, 1992.
- Honigsmann, E. A. J. "Secondary Sources of *The Winter's Tale*." *Philological Quarterly*. 34.4 (1955): 27-38.
- Hunt, Maurice, ed. *The Winter's Tale: Critical Essay*. New York: 1995.
- Kaula, David. "Autolycus' Trumpery." *Studies in English Literature, 1500-1900*. 16.2 (1976): 287-303.
- Kernan, Alvin. *Shakespeare, the King's Playwright: Theater in the Stuart Court, 1603-1613*. New Haven: Yale UP, 1995.
- Knapp, Jeffrey. *Shakespeare's Tribe: Church, Nation, and Theater in Renaissance England*. Chicago: U of Chicago P, 2002.
- Koenigsberger, H. "English Merchants in Naples and Sicily in the Seventeenth Century." *The English Historical Review*. 62.244 (1947): 304-26.
- Kurland, Stuart M. "'We Need No More of Your Advice': Political Realism in *The Winter's Tale*." *Studies in English Literature, 1500-1900*. 31.2 (1991): 365-86.
- Loughrey, Bryan, ed. *The Pastoral Mode*. London: Macmillan, 1984.
- Marrapodi, Michael, et al., eds. *Shakespeare's Italy: Functions of Italian Locations in Renaissance Drama*. Manchester: Manchester UP, 1993.
- Martz, Louis L. *From Renaissance to Baroque: Essays on Literature and Art*. Columbia: U of Missouri P, 1991.
- McIlwain, Charles Howard, ed. *The Political Works of James I*. Cambridge: Harvard UP, 1918.
- Orgel, Stephen, ed. *The Winter's Tale*. Oxford: Oxford UP, 1996.
- Palmer, Daryl W. "Jacobean Moscovites: Winter, Tyranny, and Knowledge in *The Winter's Tale*." *Shakespeare Quarterly*. 46.3 (1995): 323-39.
- Pafford, J. H. P., ed. *The Winter's Tale*. London: Methuen, 1963.
- Patterson, W. B. *King James VI and I and the Reunion of Christendom*. Cambridge: Cambridge UP, 1997.
- Peck, Linda Levy, ed. *The Mental World of the Jacobean Court*. Cambridge:

- Cambridge UP, 1991.
- Ryan, Kiernan, ed. *Shakespeare: Last Plays*. London: Longman, 1999.
- Sommerville, Johann P., ed. *King James VI and I: Political Writings*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- Tennenhouse, Leonard. *Power on Display: The Politics of Shakespeare's Genres*. London: Methuen, 1986.
- Tricomi, Albert H. *Anticourt Drama in England 1603-1642*. Charlottesville: UP of Virginia, 1989.
- Wellek, Rene. "Bohemia in Early English Literature." *Slavonic and East European Review*. 2.1 (1943): 114-46.
- Wilson, Richard. *Secret Shakespeare: Studies in Theatre, Religion and Resistance*. Manchester: Manchester UP, 2004.
- Wright, Charles H. H., ed. *Foxe's Book of Martyrs: A Complete and Accurate Account of the Lives, Sufferings and Triumphant Deaths of the Primitive and Protestant Martyrs in All Parts of the World*. London: Chas. J. Thynne & Jarvis, 1904.
- Yates, Frances. *The Rosicrucian Enlightenment*. London: Routledge, 1972.
- *Shakespeare's Last Plays: A New Approach*. London: Routledge, 1975.
- フランセス・イエイツ『シェイクスピア最後の夢』藤田実訳, 東京: 晶文社, 1980.
- ロバート・J・W・エヴァンズ『魔術の帝国: ルドルフ二世とその世界』上・下, 中野春夫訳, 東京: 筑摩書房, 2006.

“You Do Awake Your Faith”:
The Winter’s Tale and the Ecumenical Vision of James I

Masatoshi Nozaki

While working on *The Winter’s Tale*, Shakespeare, who is known to have carefully read Robert Greene’s *Pandosto*, decided to switch the two kingdoms: Pandosto, the king of Bohemia in Greene, becomes Leontes, king of Sicilia, while Egistus, Greene’s Sicilian monarch, becomes Polixenes, king of Bohemia. As a result, the tragic events which take place in Bohemia in Greene occur in Sicilia in Shakespeare, removing the famous scene of pastoral festivity, which is essentially Sicilian, to Bohemia.

The meaning of this relocation, together with the relation between Bohemia and pastoral, has been widely discussed. E. A. J. Honigmann calls attention to Proserpine myths, which derives their origin from Sicily, and argues that Shakespeare switched Greene’s two countries in order to make Perdita princess of Sicily, not of Bohemia. Louis L. Martz divides the play into three parts, not two, showing its development “from ancient Greek, to timeless pagan, to something very close to contemporary Christian.” Richard Studing and other critics persuasively argue that the Bohemian pastoral scenes are essentially “anti-pastoral.” These critics provide possible accounts of the puzzles of the play in view of its literary tradition. Their arguments, however, fail to elucidate the connotation of the Bohemian pastoral itself. What is

the connection between pastoral and Bohemia? Why is it set in Bohemia?

In the late sixteenth century, the pastoral tradition and its literary modes (eclogue, bucolic) were largely employed by Edmund Spenser, who wrote *The Shepheardes Calender* and *The Faerie Queene*, and Sir Philip Sidney, the author of *Arcadia*. It is well-known that these poets were devoutly Protestant. If the pastoral is understood as part of the religious discourse which was frequently applied and exerted by Protestant camps in early modern England, its grafting onto a Bohemian setting turns out fully coherent. Bohemia, the birth place of Jan Hus, was widely known in England through John Foxe's *Actes and Monuments* as a cradle of Protestantism. From a religious point of view, the pastoral seems more relevant to Protestant Bohemia than to Catholic Sicilia. It is not unlikely, then, that Shakespeare, by reversing the location of Bohemia and Sicilia, dramatizes the polemic of religious conflicts between Protestants and Catholics in the early seventeenth century. And it is also arguable that the union of Bohemia and Sicily at the end of the play denotes a hope for ecclesiastical reunification throughout Europe.

The Winter's Tale is thought to have been composed sometime between the winter of 1610 and the spring of 1611. During that period, what was the situation in Bohemia? What about Sicilia? What was England's foreign policy toward both nations? And how does Shakespeare treat those matters in the play? To answer these questions, the irenic religious policy employed by King James I must be examined. Shakespeare in the Jacobean era made it a rule to write one or two plays a year, which were given their first performances at the Globe or other public theatres, and then taken to Whitehall or Hampton Court during the Christmas season. Accordingly, it was too dangerous for the royal playwright to forget that James himself would watch the plays before long, and that the king might regard them as comments on the contemporary religious and political issues. It must be also remembered that *The Winter's Tale* was performed to celebrate the marriage of Princess Elizabeth Stuart with the Elector Palatine Frederick V, which took place on St. Valentine's Day in 1613. The play can thus be considered a favorite for the royal family.

When the play was in production, the Oath of Allegiance controversy was at its zenith. In 1609 James I published a book called *Apologie*. This was in fact a revised edition of the same pamphlet published anonymously the year before. *Apologie* included a preface, *Premonition*, which was dedicated to Rudolf II, king of Bohemia

and the Holy Roman Emperor (1576-1612). Pope Paul V soon sent letters to forbid Catholics in England to comply with the Oath. James had never intended to provoke the Pope because he acknowledged the papal authority to excommunicate him, if not the power to depose him. Annoyed by such a strong and immediate response of the Pope, James wrote *Apologie* and *Premonition*, and in the latter he warned the Christian princes of Europe, notably Rudolf II, against Pope Paul V. The old name of the pope was Camillo Borghese.

Some unexpected analogies can be found between some of the characters of the play and the participants in the controversy: Polixenes, whose religious thought seems not only Catholic but also Protestant, reminds the audience and readers of Rudolf II. Autolycus is also related to Rudolf, as their names both indicate 'wolf.' Paulina and Camillo may well be merged into Pope Paul V. Shakespeare was conscious of the Oath of Allegiance controversy, and he conceived a dramatization of James's ecumenical vision.